

企画総務委員会・視察研修報告

1. 日程

平成28年10月12日（水）～ 10月14日（金）

新潟県糸魚川市 「子ども一貫教育について」

石川県かほく市 「かほく市ママ課の取組みについて」

石川県金沢市 「学生のまちの推進について」

2. 参加者

市民文教委員（7名）＋事務局（2名）

《委員》◎白土 美恵子 ○渡邊 妙美 中嶋 祥元 新海 真規 加藤 賢次

野村 武文 前田 秀文 《事務局》石崎 伸一 加藤 圭祐

3. 活動報告

※ 新潟県糸魚川市 「子ども一貫教育」について

訪問日時：12日（水）14：00～15：30

【視察のねらい】

- 市発展の原動力は、未来を担う人づくりにある事は疑うものではないと思います。その「人づくり」を市民総ぐるみで教育施策の充実を図っている先進事例を学ぶ。平成21年度に「子ども一貫教育方針」を策定し、家庭、地域、園・学校、などが互いに役割を共通認識し、連携している事例など、環境づくりの施策など、刈谷市の教育に生かせるものがあると考え

【報告事項】

- 糸魚川市の考える一貫教育とは・・・
「日本一の子どもを育む」を目指して、0歳から～18歳差までの一貫した考え方で市民総ぐるみで取り組む事。家庭、地域、園学校の連携のもと、心・健康・学力のバランスがとれ、夢を持った子どもに育つ事を目指す。適時適切な切れ目ない支援を提供していく事と考えている（一般的な中高一貫教育とは異なるもの）
- 実施事項と経緯
 - ・平成21年度・・・0歳から18歳までの子ども一貫教育方針を策定
 - ◆成長の時期に応じ連続性を重視した教育
 - ◆家庭・地域・園・学校それぞれが役割を果たす交流・連携
 - ・平成22年度・・・こども課を教育委員会に新設し、子育て教育窓口の一本化をはかる
「こども一貫教育基本計画」を策定
 - ◆18歳での自立を目指す ◆策定委員会を設置（3部会・3班）
 - ・平成28年度・・・平成35年までの8年間を期間

□ 成果

- ・中学校区で目指す子ども像の協議→グランドデザインの作成、攻守を超えた研修会
ーグランドデザインの概要ー

目指す子ども像・・自ら考え心豊かで元気な子（地域に学び地域を愛する子）

- ◆よく考え判断できる子どもを育てる授業づくり
- ◆かかわり合う活動を重視した社会性の育成
- ◆体力の増進や良好な生活習慣を基盤とした健やかな体づくり
- ◆インクルーシブ教育の推進
- ◆命を大切にす防災教育の推進
- ・わかる授業づくり、社会性の育成、健やかな体づくり、このニーズに応じた教育の4つのカテゴリーの具体的方策を実施

⇒早寝早起きおいしい朝ごはん運動の定着・・小学校97.2%（95.6）

⇒学校生活を楽しく送っている子どもが多い・・小学校92.4%（87.0）

⇒郷土を愛する気持ちが育っている・・小学校90.1%（66.9%）

（）内は全国値

□ 課題認識

- ◆学力の定着
- ◆いじめ不登校対策に一層の注力が必要
- ◆高校との連携推進、家庭地域との連携

【所感】

- 学習指導要領「生きる力」の育成・・地域に学び、地域を愛する、こころ・体・学力のバランス重視など、地域特性を重視している感じ
- 基本的考え方は刈谷市とも同じ方向性であると考え
⇒0-18歳の一貫での見守り教育を体系立てて実施している姿が良く理解できる
- 家庭の役割を再認識させる
⇒子育て読本を作成し、全戸配布する（保育士、保健士の協力）など重点施策あり
⇒もっとも重要な教育が家庭である事は間違いなくと思います。ここの底上げがどうしていくのが課題であると思う
- 保一小、小一小、小一中などの垣根をなくすことが重要。それぞれの学校の特色を生かしながらも、市全体、小→高まで方針、ベクトルが同じであり、施策や新たな取組み、課題など共有できるメリットは感じる

- 視察研修とは関係ないですが、糸魚川駅前の観光ガイドビジョンに「刈谷市議会歓迎」の文字がありました。感動しました。これもシティーセールス、暖かいもてなしの心など、地域性の表れでないでしょうか。



※石川県かほく市 「かほく市ママ課の取組み」について

訪問日時：13日（木）13：15～14：45

【視察のねらい】

より充実した子育て支援施策実現に向けた取り組みとして、子育て世代ママが参加する「ママ課プロジェクト」を実施している。行政主導だけでなく、ママたちの意見を取り入れた事例を学ぶ

【報告事項】

—経緯—

- 大型店舗進出、広域幹線道路整備による金沢市への通勤圏など生活環境の変化
- 人口減少（H18 34, 874人⇒H28 34, 180人）、自然動態の減少、市外流出
- 平成22年度から定住促進PRの一環。

「子育てしやすいまち」をプロモーションするために企画立案。ママがまちづくりに主体的に関わる事で、口コミで市内外に情報発信を狙う（平成28年1月設置）

—事業内容—

- 未就園児の母親で構成、ボランティアとして活動。現在10名の在籍。市の企画情報課がコーディネーターとなって運営

⇒各種メディアに出演、イベント出演による、かほく市のPR

⇒「ママカフェ」の開催

⇒1回/月の意見交換

- ・子育てアプリの解説、ママカフェもママからの意見
- ・定住促進の、子育て支援制度の周知が必要などの意見

—効果と課題—

- 定住促進女性制度の利用件数が伸びている事で、効果を感じている
- 「まちづくり」への参画という意欲を生かせるようコーディネートが必要

【参考】

- 「かほく市若者マイホーム取得奨励金」制度の創設
⇒45歳未満、一戸建て住宅新築、最大100万円を交付
⇒県外からの転入、三世同居など特別加算では最大200万円となる場合がある
⇒その他助成 かほく市土地開発公社分譲地購入は上限50万円、自然エネルギーシステム設置補助上限16万円、ケーブルテレビ引き込み工事費無料など

【所感】

- 市の組織でなく、ボランティア（応募、声掛け等で募集）で市がコーディネートする事ママの生の声が反映される事が重要と認識する・子育てアプリ、市政への意見交換など
- 主目的は少子化対策と定住促進
⇒活動そのものが効果を生むかどうか判断しづらいが、定住促進に向けた必死さが伝わる
⇒刈谷市に置き換えた場合、今以上に若者層の口コミを重要視して、定住に向けた良さを訴求は良いと思う
⇒若者のマイホーム補助については刈谷市の思い切った施策もありではないかと考える



※石川県金沢市 「学生のまちの推進」について

訪問日時：14日（金）10：00～11：30

【視察のねらい】

若者の（学生）力を借りたシティプロモーションは有効と考える。現在9大学を有する金沢市としては、まちの賑わいづくりに学生の生活と密接な関係にあると考える。若者の心をつかむ施策の先進事例を学ぶ

【報告事項】

- 大学の市内中心地から郊外への移転、時代の流れなどにより
 - ⇒市民との交わりの希薄化（学生の6割が県外から）
 - ⇒まちに対する関心の低下
 - ⇒金沢の歴史・文化に触れる機会の減少
- 学生のまち推進条例の制定
 - ⇒「金沢市における学生のまちの推進に関する条例」・・・H22年4月施行
 - ⇒学生と市民、学生とまちとの関わりを深めるための全国初の条例

市民交流館正面



基本 理念

- ・金沢学都として情景が薄まっている
- ・学生と市民が、普段の位の中で交わり、まちに溶け込み、行き来と学ぶ姿が薄まっている
 - ⇒学生と市民との相互交流、学生とまちの関係が深まり、賑わいが創出されるまち

（役割）

- 学生・・・地域コミュニティへの参加
- 市・・・学生の支援に必要な施策の策定
- 市民及び地域
 - ・・・日常生活において学生との交流推進

- 金沢まちづくり学生会議の発足
 - ⇒まちなか学生交流外の創生・・・繁華街に学生が集い、大人と交流できるエリアづくり
 - ⇒まちなか学生交流街MAPの作成・・・学生が現地の取材と編集を実施
 - ⇒まちなか学生まつりの開催・・・平成28年10月9日（7回目）
 - ⇒金沢学生のまち市民交流館・・・平成24年大正期の旧家を改修、まちづくり、学びの場として開館

- ・3名（非常勤）+1名（市職員）
- ・サロン、ギャラリー、会議、ホール（100名収容）などの施設
- ・過去の料亭の内装等を移設利用
- ・相談窓口（コーディネータ）を配置

交流ホール内 床柱



学生がイベント準備中



- 年間予算 1,700万円、コーディネーターは有償で有識者に委託（現在4名）

【所感】

- 若者（学生）の力は、アイデアを新しく、情報発信力も強く、まちづくりに有効
- 行政の役割、学生への期待など明確にして、わかりやすい活動となっている
- 「よそ者目線」という発想が重要。結果、市の特色を生かしていると考え